



TITLE:

ウエルソン山の星覗き

AUTHOR(S):

廣津, 藤吉

CITATION:

廣津, 藤吉. ウエルソン山の星覗き. 天界 1929, 9(97): 260-262

ISSUE DATE:

1929-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161393>

RIGHT:

ウエルソン山の星視き

下關支部幹事 廣 津 藤 吉

(廣津氏は昨年夏、世界日曜學校大會の日本代表員として渡米され、其の序でに
井ルソン山へ登られたのです。同氏は本會の紹介狀を持って行かれました。)

二週餘日を要する米國への海の旅、話しづかれ讀みづかれて、稍こもすれば無聊の感に襲はれ勝のものであるが、夜は燦たる天上の星、晝は紺碧の潮の色、白玉こ碎けて飛ぶ波がしら、此等のものにじつこ眼を見据へてをれば、水や天なる大海原の只中にあつてもさして淋しさを覺ゆるものではありません。こりわけ大平洋上ハワイ附近の海の色こ空の眺は格別に美しいものだこ思ひました。日本ではつきり見るここの出来ない群星が一つ一つ燦こして眼底に映じて參ります。視力の弱い私には北冠星座の如き双眼鏡の力を借らねばはつきり觀るここの難いものであつても洋上では冠のダイヤが一つ一つ手に取る如く數へ上るここの出来るのでした。そして恁うしても日本の空では見るここの出来ない南の十字星座が薄暮を過ぎて後南の地平線上に姿を現はしてくれます。戀の乙女を垣間見るの心地がせられて非常に嬉しく感じました。

ウエルソン山の觀測所はローザンゼルス市の隣接地世界の樂園こ呼ばれてゐるバサデナから北東十二哩の距離、標高一哩の山頂に置かれてあります。百五十尺こ六十尺の塔形の望遠鏡が白く塗られた煙突の様に青空高く突立てをるのがロ市郊外からはつきり認むるここの出来ます。ロ市から山頂迄自動車で二時間こ四十分を要し、宿泊を兼ねた往復の費用が七八弗かゝります。私共の登山したのは昨年七月十三日、午後四時前の出發で、着いたのが六時半、薄暮の頃合でした。同行者は二十七八名、二臺の車に分乗して曲りくねつた山道をぐんぐんこ押し進められて行きます。この難道が大部分日本人の勞働者により堅岩を碎いて造られたこ云ふこは記憶すべきこです。右側は大概削り取られた斷崖、左方は自然の儘なる千尺の絶壁、油斷すれば底知れぬ谷間に私共を呑込ふこしてゐるのです。始め饒

舌であつた連中も此物すごい谷間に眼をやれば自から首は縮みて堅くなり
稍暫くは誰一人話し出すものもない云ふ状態でした。佐藤博士が墜落し
たのは此邊ではなかつたかゝ屢々怖氣づくこもありました。

この觀測所での第一の呼物は世界一誇つてゐる百インチの反射望遠鏡
であることは云ふ迄もない事であります。案内の記事によれば鏡の直徑が
實際のまゝ百一インチ、厚さが十三インチ、四トン半の重量、鏡丈で
四萬五千弗を要し、全體の裝置を二重蓋の圓屋根の建築物に六十萬弗云
ふ莫大な金を支拂はれてあります。裝置された望遠鏡丈で百トンの重量、
之が巧妙な電氣仕掛で圓屋根と共に觀覽者を載せた儘見定めた星を逐ふて
徐々に廻轉し行くのですから嬉しくて堪りません。茲にアダムス博士を筆
頭に二十人の専門の星學者を、十二人の計算家を、他の事務員を加へて、
總計七十人の所員が活動してゐます。太陽の觀測一つだけでも既に四萬五
千枚以上の異なつた寫眞を現像してゐる云ふのでも其活動振の如何を知
ることが出来ませう。

私共は設けの夕食が済むと、旅館の廣庭に開始されてゐる天文に關する
通俗講演を聞きに參りました。幻燈を用ひての説明、奇怪な雲の形や太陽
の皆既蝕、月面の種々相、遊星の運行の姿、恒星彗星の様な事こまか
に説明してくれます。深切なやり方だと思ひました。講演が済むと、其夜
見せてくれる世界で三番目云ふ六十インチの大望遠鏡の建物に押かけて
行きました。外人連中は凡二百餘名もあつたでせう。一年中に特に星の
觀察にやつて來るものが一萬五千餘人あるこの事です。外人の中には四斗
樽大の肥つたおかつばのお婆さんあり、男裝の年若い美婦人あり云つた
鹽梅で、婦人が過半を占めてゐました。圓屋根の中に這入つて見る氣早
の連中はや百餘名のものがずらり一列に並んでゐます。觀測のため一間あ
まりの梯子が二つ接眼鏡間近にかけてあり、一を上り他を下りて行く、私は
百數十人濟して後やつを見ることを得、天界の名物土星の環や、四つばかり
の衛星を心行くばかり眺めました、今も尙茶碗大に見へる其姿がありあ
り思ひ出されます。一人に一分間宛として約三時間かゝつた譯です。見た
後から「衛星の数が幾つあつた」「二つか三つか四つか」など騒ぐ連中のあ

つたのは可笑しな事でした。十時半を過ぎ、人々の散した後、も少し外のものを見せて貰いたいと慾ばつて残つてゐた二十名ばかりのものゝため、幸にも今度はヘルクレスの星團を見せてくれました。小さな望遠鏡でははつきりしない此星團が銀砂子を播散らしたやうにピカピカ輝いて見へるのです。吉田さんの星の研究にある『もし此星團中のどれかの星を廻轉する遊星があるとしたらあらう、其遊星は決して夜を知らないでせう。永久に幾萬の太陽が其遊星を照して異常の壯觀を呈するこゝでせう』にある其星を成程々々顔しながら見るこゝの出來た其夜の私共の幸福を感謝せずには居られませんでした。

この夜は非常の暑さでした。そして所謂蠶棚式の手摺のない一間ばかりの高さのある寢臺に攀ち上り安臥はしたものの、墜落の恐れと暑さのためおちをち眠るこゝは出來ませんでした。翌早朝は御來光を拜しやうと云ふので未明に床を蹴つてはね起き、二三町先の巖頭に立ち數十名の人々と一緒に昇天祈禱會をなし、今や遅しと旭光を待受けました。富士山に登つて八合目の岩屋から東方金波銀波の雲間に二重三重の御飾餅の姿で上り來るあの御來光を拜した眼は赤裸の大入道の如くひよつこり大きな火の玉が山の端に飛び出してくるこゝろ、あまりに呆氣なく感じました。むしろ私は其前夜山頂からローザンゼルス、バサデナ、ロングビーチ、ヴェニス方面の夜景を觀望し、其燦然たる數百萬の電光の美しさに云ひ知れぬ喜を感じたものでした。天上の星に劣らぬ地上の星、これだけでも登山觀光の快は充分に味はふこゝが出來ます。特に此山のユウカと云ふ名花が七八尺の高さに眞白の花をふさふさつけて逆に立てた竹箒の様に突立てゐるさま、松や檜の木立の間にリスや野鹿がはね飛んでゐる様子杯宛然一幅の活畫を見るが如き感を覺へました。用意を備へ、下山したのが御晝前、二時間二十分で所定の場所に歸りつくこゝが出來ました。



人事消息 われらの若き理學士上島昇氏は此の度理學部講師を囑託された。（二月二十八日付）